修士論文(要旨)
2023 年 1 月

タッピングタッチによる ASD 児への影響と
母親の育児不安・ストレス反応の緩和効果について

指導　山口　創　教授

国際学術研究科 国際学術専攻
心理学実践研究学位プログラム
ポジティブ心理分野
221J2056
廣田　祥子

Master's Thesis (Abstract)
January 2023

An Experiment on the Effects of Tapping Touch by Children with Autism Spectrum Disorder and Their Mothers

Sachiko　Hirota
221J2056
Master of Arts Program in Positive Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J.F. Oberlin　University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第１章：研究背景と目的 1
1. タッピングタッチについて 1
2. ASD(自閉スペクトラム症)とは 1
１）ASD の定義 1
２）ASD の診断基準 1
３）ASD の臨床像 2
４）ASD をはじめとした発達障害に対するタッチ研究の知見 2
3. ストレス・育児不安 2
１)ストレス・不安の定義 3
２)障害児を持つ母親の育児ストレス・育児不安に対する知見 3
4. 発達障害児を持つ親子について 3
１）発達障害児を持つ親について 3
２）ASD 児と親子の絆について 3
5. 研究の目的 4
6. 仮説 4
第２章　研究方法 4
1. 研究内容 4
１）研究対象者の属性 5
２）抽出方法 5
３）調査時期 5
2. 方法 5
１）調査の構成 5
２）セルフタッピング(ST)/タッピングタッチ(TT)の実施方法 7
３）手続き 8
3. 分析方法 8
4. 研究における倫理上の配慮 8
第３章　結果 9
1. 調査対象者 9
2. POMS2(Profile of Mood States 2nd Edition)短縮版 9
3. 発達障害児・者をもつ親のストレッサー尺度(DSPSI 12
4. 視覚的アナログスケール VAS(Visual Analogue Scale) 14
5. 日本版感覚プロファイル 短縮版(SSP) 21
6. 自由記述 23
１)テキストマイニング 23
２)好まれたタッチ 26
３)好まれたタッチ部位 27
４)好まれなかった部位 29
５)ST/TT をおこなった感想と児童の様子 30

第 4 章　考察 32
1. セルフタッピング(ST)/ タッピングタッチ(TT)について 32
1)児童 32
2)母親 33
2. 今後の展望 34

文献
資料

研究背景と目的

タッピングタッチとは、子どもから大人まで誰でも行うことができ、心と体の疲れが取れる癒しの手法である(中川,2004)。方や背中を左右交互に軽くタッチすることを基本とし、指の腹で触れるため、ソフトで心地よいタッチである。心身のリラクゼーションだけでなく、相手との需要的な関係性が形成されることを確かめた、タッピングタッチによる相互ケアの研究では、「心身のリラクゼーション」と、「受容的な関係性の形成」の効果が期待できる相互ケアの手法であると示唆されている(石田他,2021)。タッピングタッチの実施においてケアする側にも効果があるのかを検討した研究では、ケアするのみ、されるのみの場合でも同程度に「信頼感」は上がるが、相互にタッピングタッチを実施した方が、効果が高まることが明らかになっている(福井,2016)。タッチングの特徴として、タッチされる側だけではなく、タッチする側の不安やストレスが癒やされることが明らかになっている(Yamaguchi & Akiyoshi,2016)。

様々な触れるケアの中でもタッピングタッチを ASD の児童と母親に実施した研究はこれまでにない。そこで本研究の目的は、自閉スペクトラム症児(以降：ASD)とその母親に対しタッチの中でも「タッピングタッチ」の実施を行い ASD 児童の心理的・生理的変化、及び母親の育児不安やストレスに及ぼす影響について明らかにすることである。

仮説としては、自閉スペクトラム症児(以降:ASD)とその母親に対しタッチの中でも「タッピングタッチ」の実施を行い、①心理的効果として、情緒の安定、対人関係の変化が可能になる。生理的効果としては、触覚過敏性が軽減し、活動量が増加する。
②タッピングタッチの実施により、育児不安・ストレスが軽減が期待される。③タッピングタッチ実施により、母子間の非言語的コミュニケーションツールとなり、親子関係が向上する。上記の 3 つを仮説とし、タッチの効果について検討する。

方法

本研究は、桜美林大学研究活動倫理委員会から承認を得た(承認番号：21059)。

本実験で用いた手技は、2 人 1 組で行うタッピングタッチ(以降：TT)と、1 人で行うセルフタッピング(以降：ST)の 2 つであった。

本研究に用いる ST/TT の創始者である中川一郎に対し、実験の概要の説明を行い、ST/TT を研究に用いることについては同意を得た。

実験参加者は、合計で 30 組であった。母親の平均年齢は、42.80 歳(SD=4.54)であった。児童の平均年齢は、8.93 歳(SD=2.65)であった。性別は男児 28 名、女児が 2 名だった。対象者の全ての児童が ASD の診断を受けていた。

実験期間中は、介入を行わない期間前・後、ST/TT 実施後に Google Forms を用いて質問調査を実施した。使用した尺度は、「フェイスシート」、「日本版感覚プロファイル 短縮版(SSP)、「POMS2(Profile of Mood States 2nd Edition)短縮版」、「育児ストレス尺度(Childcare Stress Scale)短縮版」、「視覚的アナログスケール VAS(Visual Analogue Scale)」についての調査を実施した。

ST/TT 実施期間中は、YouTube の限定公開設定を用いた動画の URL より、動画を視聴しながら各家庭で実施した。実施後は Google Forms を用いて母親と ASD 児それぞれの ST/TT 実施の記録を母親が入力した。

結果･考察

本研究では、自閉スペクトラム症児(ASD)とその母親に対し、タッチの中でも「タッピングタッチ」の実施を行いASD児童の心理的・生理的変化、及び母親の育児不安やストレスに及ぼす影響について明らかにしてきた。その結果、ASD児童はVASにおいて、ST/TT実施後、児童の印象は、緊張感・不安が軽減し、落ち着いていた。そして、嬉しそう、楽しそうといった気分状態が向上していた。一方で、SSP短縮版において有意差が見られなかった。これは、SSPにおける質問の回答者がASD本人ではなく、母親であったことから、ASD児本人の特性変化に対する気づきに限界があったことが考えられる。一方で、自由記述からは、「児童の落ち着き」、「自ら触れてくる」、「大人しくなる」といった記述が見られたといった行動改善が窺え、心理的効果としての情緒の安定、ステレオタイプの行動減少が示唆された。

母親に関しては、POMS2において、母親のネガティブ感情の低下、緊張・不安の軽減、活気・活力が向上したことが明らかになった。DDPSIにおいては、「将来・自立への不安」を低下させる効果があることが明らかになった。VASや自由記述においては、ST/TT実施後は緊張・不安の軽減や自責の気持ち・落ち込みの低下が回答結果から窺えた。また、子どもの気持ちをより理解することや、子どもと関われて嬉しい・楽しい、スキンシップが増えたといったポジティブな回答結果が得られた。今回の研究では、ST/TTの介入前や初期の頃は、児童の反応の乏しさや不確実性を感じ、児童からの肯定的な反応を得ることに困難を感じている様子が。統計の結果や自由記述から感じられた。しかし、ST/TTの介入が進むことで、児童と触れ合う時間が確保されることで、親子間での言語的･非言語的コミュニケーションを行うことにつながり、母親の児童に対する理解が深まったことが窺えた。

今後の展望

今回行ったST/TTの介入において、ASD児童の情緒や行動の改善、母親の育児不安やストレスに対して改善が見られた一方で、苦手な部位や興奮してしまうという報告が見られた。高田・長江(2012)や越野(2010)は、触れる相手に向き合い親子の情緒的絆を深めるためには子どもが心地よい身体的体験を共有する環境が重要であると述べている。今後、ASD児童に対してST/TTを実施する際には、事前に苦手な部位や抵抗が少ない部位を選び、親子同士が負担の少ないタッピングを実施することが、抵抗の少ないタッチケアにつながると考える。

母親に関しては、ST/TTの実施により効果を感じ気分の変化や、ストレス・不安の軽減が窺えた一方で、ST/TTの介入前や初期の頃は、児童の反応の乏しさや不確実性を感じ、児童からの肯定的な反応を得ることに困難を感じている様子が伺えた。大森(2009)よると、母親が期待する効果が見出せないことで負担感が増すことや、過大な期待を持つことで子どもの小さな変化が見落とされている可能性があると述べられている。そのため、子どもの小さな変化を援助者が母親に伝えること、母親の気づきをタッチケアの効果として評価するといった介入を行い、母親の気づきを支えることが重要であると述べていた。このことから、今後母子間でのタッチケアを行う際には、母親自身がタッチケアを通して、児童に対する小さな変化に気づき、肯定的な関わりが生まれるような援助者の助言や振り返りを設けることが、より良い親子の絆や触れ合いにつながると感じる。

文献

・浅野みどり・古澤亜矢子・大橋幸美・吉田久美子・門間晶子・山本真実(2011) 自閉症スペクトラム障害の児童をもつ母親の育児ストレス 子どもの行動特徴、家族機能、QOL の現状とその関連 家族看護学研究 16(3),157-168

・Cullen, L. A., Barlow, J. H., Cushway, D. (2005) Positive touch, the implications for parents and their children with autism: an exploratory study. Complementary Therapies in Clinical Practice. 11, 182-189.

・傳田健三(2017), 自閉スペクトラム症(ASD)の特性理解 心身医学.57(1),19-26.

・Erin Tehee, Rita Honan, David Hevey (2008). Factors Contributing to Stress in Parents of Individuals with Autistic Spectrum Disorders Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities, 22(1),34-42.

・Escalona, A. Field, T., Singer-Strunck, R., Cullen, C., Hartshorn, K. (2001) Brief Report: Improvements in the Behavior of Children with Autism Following Massage Therapy. Journal of Autism and Developmental Disorders. 31(5), 513-516.

・福井義一(2016), タッピング・タッチの実施においてケアする側にも効果があるのか？ 甲南大學紀要. 166,137-145.

・石田有紀・城戸由香里・園田直子(2021).皮膚刺激を用いた相互ケアによる心身のリラクセーションおよび受容的関係性形成の効果 久留米大学心理学研究.20,1-7.

・河原忍(2020), 自閉症スペクトラム障害に対するあん摩療法の効果についての研究 筑波技術大学期間リポリポトジ 保健科学専攻　学位論文(未公刊)

・北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男 (1995) .障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響 特殊教育学研究.33 (1), 35-44.

・越野由香(2010), 発達障がいをもつ子どもとマッサージの効用　―自律神経の調整に注目して― 実践女子短期大学紀要.31,49-58.

・厚生労働省 e-ヘルスネット 休養・こころの健康 ライフサイクルとこころ　ASD(自閉スペクトラム症、アスペルガー症候群について)
(https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-03-005.html)

・小泉 晋一 (2018). 自閉症スペクトラム障害の子どもと保護者のグループに対するリラクセーション・トレーニングの適用　共栄大学教育学部研究紀要, (2), 73-81.

・Lesley A. Cullen-Powell, Julie H. Barlow, Delia Cushway (2005)Exploring a massage intervention for parents and their children with autism: the implications for bonding and attachment J Child Health Care (4),245-255

・大森裕子(2009), 障害児へのタッチケアがその母親に及ぼす影響 甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編(2),35-45

・POMS2(Profile of Mood States 2nd Edition)短縮版 サクセス・ベル株式会社

・酒井和香・村上理絵・南恭子(2019) 自閉症児の母親が感じる心的不安に関する先行研究の概観 特別支援教育実践センター研究紀要　(17),1-9

・笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井茂樹(2010). 発達障害のある子どもへの早期発見･早期支援の現状と課題 国立特別支援教育総合研究所研究紀. 37,3-15.

・中川一郎(2004),タッピングタッチ こころ・体・地球のためのタッピングタッチ　朱鷺書房
・中川一郎(2012), 心と体の疲れをとるタッピングタッチ 青春出版社
・中村登志子・有吉浩美・洲崎好香・高山直子 タッチケア教室に参加した母親の育児意識に関連する要因 日健医誌.20(1),15-22.
・夏堀摂(2001) 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程 特殊教育学研究,39(3),11-22.
・日本版感覚プロファイル 短縮版(SSP) 日本科学文化社
・ShujiTsuji, TerukoYuhi, KazumiFuruhara, ShogoOhta, YutoShimizu and Haruhiro Higashida .(2015) ”Salivary oxytocin concentrations in seven boys with autism spectrum disorder received massage from their mothers: a pilot study”, Frontiers in Psychiatry, Vol 6. ArtID: 58, Switzerland : Frontiers Media S.A.,1-5
・視覚的アナログスケール VAS(Visual Analogue Scale)
・高橋三郎・大野裕(監訳)(2014), DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院. 26-29.
・高田みなみ・長江美代子(2012),非接触文化である日本の看護臨床場面においてタッチングが有効に働く要因：総合的文献研究 日本赤十字豊田看護大学紀要.7(1),121-131.
・Yamaguchi, H. Akiyoshi, Michiyo(2016), The effect of massage on release of oxytocin. International Journal of Psychology.
・山本真実・門間晶子・加藤基子(2010) 自閉症を主とする広汎性発達障害の子どもをもつ母親の子育てのプロセス 日本看護研究学会雑誌 33(4),21-30
・山根隆宏(2013), 発達障害児・者をもつ母親のストレッサー尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 83(6),556-5.